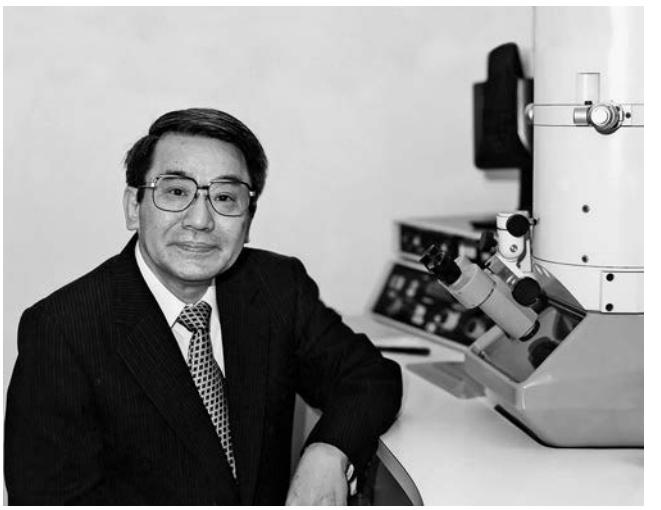
追悼文

上原康生先生の思い出



2016年9月4日，上原康生先生が急逝された．享年83歳．愛弟子である川崎医科大学の樋田一徳教授によれば，「午前中はいつもの通り，奥様，近くにお住いの娘さん夫婦と語らいながら過ごされた後，午後になって急変され，ご自宅の床にて奥様と娘さん夫婦に囲まれて息を引き取られた由．」

上原先生は1933年生まれ，九州大学医学部卒業後，八幡製鉄所病院にて実地修練，1960年から九州大学医学部解剖学第二講座（和佐野武雄教授）助手，1965年大阪大学助手，1969年オーストラリア・メルボルン大学に出張，医学博士取得，1971年東京大学医科学研究所助手（微細形態研究部門・濵清教授），1972年同助教授，1973年愛媛大学医学部教授（解剖学第二講座），医師免許取得，1990年熊本大学医学部教授（解剖学第二講座），1997年退官．退官後は愛媛県高浜に転居された．

上原先生ご夫妻に私が初めてお会いしたのは，1971年メルボルン大学留学時である．生前は親しくしていただいていたので，以下は上原さんと書かせていただく．最初にお会いした時は，当時動物学教室主任のジョフリー・バーンストック教授宅だったと思う．私はその日にメルボルンに到着した．教授がなにか言ったのを受けて，上原先生が「イエス，バット」と言ったときに，バーンストック教授がすかさず「あんたのイエス・バットは英語でいうノーのことだろ」と言われた．

その数日後，メルボルンを流れるヤラ川の近くにやっと家を見つけ，近くにスタッドレー公園があるので，そこを見に行った．すると芝生に敷物を敷き，日本人の家族らしい人たちがいたが，その中に上半身裸の男が混ざっていた．それが上原さんだった．肌寒い日だったのに，なぜ裸だったのか．上原さんと一緒にいたのは商社員のご家族で，上原さんとたまたま高校の同級生だということだった．その人がヤラ川にかかっている橋の上で，「ここから飛び込んだら，百ドル」と口走った．そのとたん，上原さんが飛び込んだという．橋の高さは計っていないが，十メートルはあったのではなかろうか．

これ以降，メルボルンに滞在中は上原ご夫妻に大変お世話になった．お酒も好きで，ある朝上原宅に伺うと，上原さんが飲み過ぎでバスタブの中で寝ていると奥様がいう．確認に行くと，実際に寝ている．でもお湯につかっているのである．奥様に「お湯を落として，毛布でくるんでおいたらどうですか」と申し上げたら，「そんなことはもうやりました，濡れた毛布ができただけです」と返された．毛布でくるんでも，自分でお湯を出してしまうのである．

いまの人は個性をいう割に，個性がない．自由をいう割に，自由ではない．上原さんのことを想うと，しみじみそう思う．現役の解剖学者の時代に，その意味で私は上原さんがいちばん好きだった．自分が自由にふるまう人こそが，他人を自由に向けて開放する．上原さんが大勢のお弟子さんを育てられたのは，故なきにあらず．私もその末尾に加えていただけないかと思う．東京大学脳研究所の金光晟教授とも親しくしておられ，ある時上原さん宅に一緒に泊めていただいた時には，お二人で桂枝雀の落語のレコードを仲良く聴いて，夜中まで笑っておられた．

オーストラリアに何度か行かれたのは，日本にはない，あの地のある種の自由さを好まれたからだと思う．後にブリスベン大学教授になった，当時は若い助手だったゴードン・キャンベルともごく親しくしておられた．二人の会話といえば，ほとんど冗談だけだった．

上原さんはじつはナチュラリスト，自然の愛好家だったと思う．だから釣りが好きだったし，自然を訪ねてあちこち行くのが好きだった．私のために虫を採ってきてくれたこともある．オーストラリア固有のゾウムシの一群に属するもので，その標本は採集場所，年月日，採集者を記録したラベルを付けて，いまだに私の手元にある．

熊本に赴任されてからは，ほとんどお会いする機会がなくなった．残念なことだが，私自身があれこれ忙しくしていたからである．東京大学は当時定年が六十歳，上原さんと私はほぼ同じ年に退官するはずだったが，私が定年三年前に先に辞めたので，お会いする機会がさらに減ってしまった．

電子顕微鏡による微細形態の研究について，上原さんの優れた業績に触れるべきであろう．でもそれは調べればわかることである．それに上原さんは業績主義を嫌っておられたと思う．濵清先生のお弟子さんたちは，一流の審美眼を持っておられた．それは倫理観でもあり，学問の評価基準にも通じる．お弟子さんたちにそれが受け継がれていくことを強く期待したい．

養老孟司（東京大学名誉教授）